

てこな・ミュージズ・ジャーナル

オーケストラの中の 大きな楽器たち

●コントラバス

身長180センチから200センチ。体重は10キロ。弦は非常に張力の強い4本。持ち運びは大変ですが、重くて一人で持てないということはありません。以前、東京フィルのコントラバス奏者の方にアンサンプルをお願いした時は、楽器は長々と堂々と自動車の中で「寝て」運ばれてきました。さらに遠く、飛行機に乗せる時は、コントラバスケースを貸してくれるように頼みます。大きな衣装棚以上の高のケースですが、運送料は規定重量以内の手荷物と同様に無料だそうです。

音域がチェロより1オクターブ下ということから、演奏曲目は決して少なくありません。オリジナル曲と言うと、ハイドンと同時代の作曲家ディッターズドルフの「コントラバス協奏曲二長調」、ロッシェニによる「チェロとコントラバスのための二重奏曲二長調」などがあります。そして有名なところではサンサーンスの「動物の謝肉祭」の「象」です。

●チューバ

オーケストラの中でコントラバスの横で大きな管楽器というとチューバです。コントラバスのケースは硬く大きいので、電車の改札を持ち主とともに通るということはありません。でもチューバは袋状の入れ物で背中にかつぐことができます。ただし非常に大きいので、何を担いでいるか、楽器だと知らない人にとっては不審者になることも。あるオーケストラ団員は改札口で呼び止められ、中を見せるようにと言われたそうです。人間でも入っているかと思ったと。重さは9キロほどしかありませんが、どっしりとしていて、持ち主がだんだん似てくるようで、チューバ体型と呼ばれるものがあるとかないとか。

協奏曲でもっとも有名な曲は、20世紀半ばまで生きたイギリスのヴォーン・ウィリアムスのものです。

●ティンパニー

椅子はコントラバスと同じものを使います。大体の演奏会でティンパニーは舞台中央より左奥ひときわ高いところに見えます。高音を右側に低音を左側に、大体3台おきます。音程のある打楽器なので、チューニングが大変ですが、ティンパニー協奏曲は古典からあり、活躍する曲にストラヴィンスキー

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

の「春の祭典」をはじめ、リヒャルト・シュトラウスの「ツァラトゥストラはかく語りき」などがあり、シンフォニーにはなくてはならない楽器となっています。

●ハーブ

大きさはコントラバスとほぼ同じ180センチ。弦は47本。7個の足ペダルが付いていて、右足はホ、ヘ、ト、イ、左足はロ、ハ、ニの音を担当します。ペダルを踏まない時は半音低いbフラットがついた状態、ペダルを半ばまで踏むと半音高くなってbフラットがなくなり、全部踏み込むとそこから半音あがって#シャープがついた状態になります。美しく流れるような曲想を生み出せることから、パツハ、モーツァルトなど、古典から現代まで、さまざまな作品で活躍します。

●オーケストラの顔～コンサートマスター～

演奏会が始まると、まずオーケストラメンバーが入ってきます。そして指定の場所に着くと、客席を見回す方が多いようです。大きな楽器奏者で客席が見えにくいというとチューバだけではしょうか。でももっとも見える場所と言えば、もちろん、指揮者の左側のコンサートマスターのところで、ここは客席からもよく見えます。そこで最後に、演奏が始まる前のコンサートマスターの方々の表情をちょっとスケッチしてみました。

満員になった3月22日のNHK交響楽団演奏会。コンサートマスターの篠崎史紀さんは指揮者が登場する間、オーケストラと客席の統率者たる雰囲気、お客さまの様子を舞台の上からゆるりとご覧になっていました。東京交響楽団のソロ・コンサートマスターの大谷康子さんは、さあこれから演奏会が始まりますね。客席には「みなさん、こんにちは。よろしくお願いますね」、そしてメンバーには「さあ一緒に演奏しましょう」というお声が聞こえてくる様な、本当ににこやかな表情です。東京フィルの荒井英治さんは、「演奏することが大好きなんです、演奏会って楽しいですね、嬉しいなあ」といった様子で、舞台に出ているらしいです。

●半年先のお楽しみ！

さて次の当財団でのフル・オーケストラ演奏会というと、少し先になりますが、9月22日です。オーケストラは東京フィルハーモニー交響楽団。指揮者は佐渡裕さんを予定しています。大人気の佐渡さんは市川初登場です。待ちに待った佐渡裕演奏会。曲目、チケット発売時期などのお知らせは、もう少しお待ちください。